

カナダ西部平原州における小麦プールの形成

田 中 俊 弘

はじめに

小麦プール (Wheat Pool) とは、主にカナダ西部平原地域の農民が、小麦を一括管理する備蓄場所と販売ルートを自分たちで確保しようと設立した一種の農業組合である。1923 年にアルバータ州で、そして翌 1924 年にはサスカチュワン州とマニトバ州でも、それぞれの小麦プールが立ち上がった。

農民たちの政治・経済運動は、カナダ平原地域への入植が本格化し始めた 19 世紀末(世紀転換期)から第二次世界大戦前までの西部史における最も重要な主題の 1 つであり、小麦プールの形成と発展、そして衰退も、その史的展開に位置づけられる。

そもそもカナダの平原地域に移民が大量流入したのは、大陸横断鉄道が東部と平原地域をつなぎ、寒冷地で育つ小麦の品種が作られた 19 世紀末から 20 世紀初頭以降であった。その時期にモルモン教徒の移民がもたらした灌漑技術も重要な意味を持ったし、さらに、1890 年にアメリカ合衆国のフロンティアが消滅したことも、カナダ平原州の移民ブームの呼び水となった。もちろん、ターナー (Frederick Jackson Turner) の言ったフロンティア消滅は、象徴的な意味でしかないが、その後、「最後の最良の西部 (The Last Best West)」の喧伝文句で、カナダ西部平原地域への移住キャンペーンが展開された⁽¹⁾、たとえば、アルバータ小麦プールの初代会長をつとめたウッド (Henry Wise Wood) がそうだったように、アメリカでの土地の高騰ゆえに、多くの農民がカナダ平原地域への移住を決断したのである⁽²⁾。

コールドウェル (Wilber W. Caldwell) の説明を借りれば、「(ターナーの言う)

フロンティアは、アメリカの経済的・政治的・社会的病理を治癒する魔法の靈薬であったし、アメリカ的な生き方を創造する重大な手段であった」が⁽³⁾、カナダにとっての西部も、また違った意味で理念上の理想郷であった。レニー (Bradford J. Rennie) は、移民たちがそのようなユートピア思想を抱いた理由を次のように説明している。

新世界や新しいフロンティアへの移住は、しばしばユートピア的な希望を生む。人が自分たちの家・コミュニティ・祖国を離れて、遠い、あまり人の住まない、未開の地に定住する時、彼らはそこが約束の地だと信じる必要があった。そうでなければ、移住の決断は愚かで、破滅を招きうるものだったことになる。誰がそのように考えたいと思うだろうか？⁽⁴⁾

だからこそ、移民たちは、移住地の厳しい自然環境を嘆きはしても、彼らの批判そのものは政府や資本家に向けられた。平原地域の大地は、彼ら農民が、政府や資本家に搾取されてさえもなお、自分たちに繁栄をもたらしてくれる豊かさを持つと信じた。アルバータ農民連合 (The United Farmers of Alberta, UFA) の会長だったバウアー (James Bower) が 1910 年に主張したように、西部農民は、自然環境が理想的であるにもかかわらず、「人民の福利に役立たない多くの人工的な条件に」苦しめられていると認識した⁽⁵⁾。人工的な条件を設定しているのは、政府や東部の資本家だという認識であり、その種の不要かつ不当な介入を防げれば、自分たちの理想郷が実現できると期待したのである。

本稿では、19 世紀末以降のカナダ西部平原地域における農民運動史で、小麦プールの重要な到達点と位置づける。先行研究を踏まえつつ⁽⁶⁾、関連組織の当時のパンフレットや機関誌、新聞を使用して、乱立と統廃合を繰り返した農民団体の動向を整理しながら、その展開を追い、さらに、その1つの頂点となった小麦プールの設立をめぐる議論に分け入る。小麦プールについては、マニトバとサスカチュワンの動向にも目配りしながら、しかし所有史料の関係から、アルバータの状況を中心に検討する。

1. カナダ平原地域における農民運動の系譜

小麦プールの形成過程とは、平原地域農民運動が組織化する歴史そのもの

であった。本節では、農民運動の初期の展開を、それぞれの組織を関連づけながら辿っていく。

カナダの他の多くの運動と同様に、農民運動もアメリカ合衆国由来であった。北米最初の農民組織が誕生したのは、1867年のワシントン D.C.だとされるが、ケリー (Oliver Judson Kelley) を創始者とする農民共済組合 (The Grange, or Order of Patrons of Husbandry、後の The National Grange of the Patrons of Industry) の運動は、1872年以降、カナダにも押し寄せ、ケベックやオンタリオ、マニトバなどにカナダ支部が作られた⁽⁷⁾。

その後のカナダの大規模な農民組織には、1883年設立のマニトバ・北西部農民保護連合 (Manitoba North-West Farmers' Protective Association) や、シカゴの組織の分派として 1889年にオンタリオ州サーニア (Sarnia) を拠点として勢力を広げたパトロン・オブ・インダストリー (The Patron of Industry) があるが⁽⁸⁾、その後の運動に直結する重要な機構としては、マザーウェル (William Richard Motherwell、後の連邦政府農相) が初代会長を務めた 1901年設立の準州穀物生産者連合 (Territorial Grain Growers' Association、TGGA) が挙げられる。

この組織は、連邦政府が 1900年に施行したマニトバ穀物法 (Manitoba Grain Act) に呼応して誕生した。この法律が農民の権利保障を目的に作られながら、実質的にその役割を果たせなかったからこそ、自らの手で権利を守ろうとする運動が広がったのだ。

マニトバ穀物法の正式名称は、「マニトバ検閲地区における穀物交易に関する法律 (An Act respecting the grain trade in the Inspection District of Manitoba)」であり、いまだ州に昇格する以前だった現在のサスカチュワンとアルバータも同法の影響を受けた⁽⁹⁾。57条からなる同法は、ウィニペグに監査役を置き (第3条)、平屋倉庫 (flat warehouse) や穀物エレベーター (grain elevator) — 穀物を貯蔵し、そこから貨車などに直接積み込む施設 — の業者を毎年更新のライセンス制とし (第4条)、業者の責任範囲を定めた (第26条など)⁽¹⁰⁾。平原地域における農民の権益保護を意図したがゆえに、後に「農民のマグナ・カルタ (Agrarian Magna Charta)」とまで評されたマニトバ穀物法ではあるが、しかし実際には、彼らが既に手にしていた権利を認めたにすぎなかった⁽¹¹⁾。さらに、同法を受けてエレベーター業者は結束し、北西部エレベーター連合 (North-West Elevator Association、後の北西部穀物ディーラー連合 [North-West Grain Dealers Association]) を作って対抗姿勢を鮮明にした⁽¹²⁾。

また、法律施行の翌年1901年の秋には、平原州では未曾有の大収穫を得たが、カナダ太平洋鉄道会社(Canadian Pacific Railway, CPR)は、それを運ぶ備えができておらず、結局多くの小麦を駄目にしてしまった⁽¹³⁾。そんな中で、TGGAは、法律の不備及び業者や政府に対する失望を背景に誕生した。そして、業者と直接関係しない監査役の人選や、必要とされる貨車が必ず保証される制度が、彼らの最初の要求となった⁽¹⁴⁾。

TGGAの創設は、後の小麦プールを含めたカナダ平原地域の様々な農民団体に直接的な影響を及ぼした。スターリング(Bob Stirling)らによれば、それは、「農民階級(agrarian class)形成の証拠とみなすのには議論の余地があるが、少なくとも、家族農民の間に民主主義の意識が覚醒している指標になった」のである⁽¹⁵⁾。

サスカチュワン・アルバータ両州が創設された1905年以降、TGGAは分裂して、サスカチュワン穀物生産者連合(Saskatchewan Grain Growers' Association, SGGA)とアルバータ農民連合(Alberta Farmers' Association, AFA)になった⁽¹⁶⁾。これらを含めて、平原3州には様々な関連団体が、時に対立しながら共存した。AFAは1909年にカナダ平等協会(Canadian Society of Equity、アメリカ平等協会の影響を受けて1902年にエドモントンで誕生した組織)と合同してアルバータ農民連合(United Farmers of Alberta, UFA)となった。SGGAは、1923年に分裂して、その一派がカナダ農民組合(Farmers' Union of Canada)となったが、1926年には再び合同して、カナダ農民連合サスカチュワン支部(United Farmers of Canada [UFC], Saskatchewan Section)という急進的な組織を形成した。

マニトバでは、TGGAの2年後に誕生したマニトバ穀物生産者連合(Manitoba Grain Growers' Association, MGGA)が、1920年にはマニトバ農民連合(United Farmers of Manitoba, UFM)に再編された。また、平原3州の東隣のオンタリオで1914年に設立され、1919年から州政権に就いたオンタリオ農民連合(United Farmers of Ontario, UFO)も同系列の組織だった。1910年には、これら4州の組織を束ねるカナダ農業評議会(Canadian Council of Agriculture, CCA)が設立された。それは、州の枠を超えた団体行動によって、「農業に課されている抑圧的な負担からの救済を要求する」取り組みであり、このCCAが中心となって作成した「農民綱領(Farmers' Platform)」——19世紀末の保守党のナショナル・ポリシーに対抗するニュー・ナショナル・ポリシーの発露と評

される——では、彼らは関税関連諸法の改正や鉄道の国有化を連邦政府に要求した⁽¹⁷⁾。

こうした圧力団体の活動の傍らで、農民たちは自らの手でエレヴェーター管理会社を運営する運動にも着手した。設立する契機の1つとなったのは、北西準州農業コミッショナーの指示に基づいて1903年と1904年に実施された科学者による実験だった⁽¹⁸⁾。等級の異なる小麦をそれぞれ粉にしてパンに焼いて比べたところ、焼き上がりにはほとんど差異がなかったのである。それは、農民たちの作った小麦が、不当に低価格で扱われてきた証だと考えられた。また、取引所が等級の異なる小麦を混合しているという指摘もあった。そうした不信感から、TGGAは、小麦の先物取引を行なうウィニペグ穀物取引所(Winnipeg Grain Exchange)の査察が必要との判断に至った。

その査察者の1人に選ばれたのが、パートリッジ(Edward Alexander Partridge)である。彼は、元は教員をしていたが、1885年に結婚後、サスカチュワン州シンタルータ(Sintaluta)で、家族で農業を営んだ⁽¹⁹⁾。その後、TGGAの創設に関わり、穀物生産者穀物会社(Grain Growers' Grain Company、GGGC)の立ち上げにも尽力して、その初代会長を務めた他、第一次世界大戦後は、農民利害を代表する連邦政党として誕生した進歩党(Progressive Party of Canada)に参加し、さらにサスカチュワン協同小麦生産者有限会社(Saskatchewan Co-operative Wheat Producers Limited、後のサスカチュワン小麦プール)の設立にも参加した。彼も、アルバータのウッドらと同様に、初期の農民運動の中核で多岐にわたる活動をした人物だった。

1904年秋に穀物取引所を査察した後、翌年1月のMGGA年次大会に参加したパートリッジは、農民の手で小麦を扱う会社を立ち上げるべきだと進言し、それを受けてMGGA内に検討委員会が設置された⁽²⁰⁾。そして、翌年1906年9月5日には、彼を会長として、ウィニペグに本社を置く合資会社GGGCが創設されたのである。ウィニペグ穀物取引所に一業者として入札参加する権利を得ようとした彼らの試みは、他の業者の反対にあって失敗に終わり⁽²¹⁾、それが同社の限界を示していたが、とはいえ、政府に働きかける圧力団体として活動したTGGAとは異なり、農民自らの手で生産物の集積と出荷を扱おうとするGGGCの活動は、後に1920年代に小麦プールを設立する際の発想の源になったに違いない。また、同社は1907年からは『穀物生産者の手引き(Grain Growers' Guide)』紙を刊行し始めたが、パートリッジの下で編集され、

MGGA、SGGA、UFAの後援で「アルバータ、サスカチュワン、マニトバの農民たちに向けて」発行された同紙は、西部農民の思想と運動の形成にも貢献し、第一次世界大戦後には進歩党の機関誌的な役割を果たした⁽²²⁾。

GGGCは、アルバータ農民協同エレヴェーター会社(Alberta Farmers' Co-operative Elevator Company)——UFAの補助組織として1913年に誕生した会社——と1917年に合同して、穀物生産者連合(United Grain Growers, UGG)となった。

サスカチュワンでは、エレヴェーター管理会社の設立に関して違った動きが見られた。州自由党政府が、その設立を財政的なバックアップを含めて積極的に支援したのだ。スコット(Walter Scott)州首相は、穀物エレヴェーターに関するロイヤル・コミッションの設置を手配し、その勧告に基づいて、農民主導のエレヴェーター会社であるサスカチュワン協同エレヴェーター会社(Saskatchewan Co-operative Elevator Company, SCEC)が1911年に立ち上げられた⁽²³⁾。その初代会長には、SGGA会長でもあり、後には進歩党の議員として連邦議会で活動するマハーグ(John Archibald Maharg)が就任した⁽²⁴⁾。

こうして誕生した UGG や SCEC が、各州の小麦プールの先行組織となった。

第一次世界大戦以降の農民は、それまでの経済活動や圧力団体としての運動に加えて、直接的な政治介入を進めた。UFM や UFA、そしてオンタリオの UFO は、それぞれの州で政権に就いたし、連邦政府のレベルでは、各組織が進歩党の躍進を支えた。短命ではあったが、進歩党は、1921年連邦選挙では自由党に次ぐ58議席(235議席中)を獲得し、国会の場で平原地域の農民の声を代弁したのである。

以上のように、圧力団体からエレヴェーター管理会社の運営、そして政治への直接介入という方向で、平原地域の農民運動が展開したが、そこでは、何人もの傑出した指導者が、同時に複数の組織の中核で運動に関わった点も特徴的であった。既に触れたパートリッジやマハーグもその代表格であるし、UFAに設立から関わり、CAAとアルバータ小麦プールの両方で会長を務めたウッドや、GGGとUGGの会長を務めた後でボーデン(Robert Laird Borden)首相下の連邦政府に農相として入閣し、その職を辞した後に進歩党を率いたクリーラー(Thomas Alexander Crerar)も同様である。彼らは、——自由党との関係や農民以外の組織との連携をめぐって繰り広げられたウッド対クリーラー

一の議論に象徴されるように—お互いの主張の相違で時に激しく対立しながら⁽²⁵⁾、平原地域の農民運動に一定のつながりと同時に広がり多様性をもたらした。西部農民の運動は、第一次世界大戦を経て、アプローチの手段を増し、小麦プール成立の時期に円熟期を迎える。

2. 連邦政府の介入をめぐる議論：小麦局の設立と再開の問題を中心に

前節で触れたとおり、農民たちの不満の矛先は、商業系の(農民所有ではない)エレヴェーター会社や鉄道会社、そしてウィニペグ穀物取引所と共に、連邦政府及び州政府にも向いていたが、政府側が平原地域農民のために何ら策を講じてこなかったわけではない。そもそも、ボーデン連合党政府とキング(William Lyon Mackenzie King)自由党政府で農相を務めたクリーラー(1917-19、1935)や、キング政府のマザーウェル農相(1921-26、1926-30)など、西部の農民運動を代表する人物を閣内に取り込んできたように、連邦政府は西部農民の声をオタワで代表させる閣僚人事に腐心したし、農民運動の要請を受けながら、様々な法律を整備した。

関連諸法のうち、マントバ穀物法は1903年に改正され、さらに1912年にはカナダ穀物法(Canada Grain Act)へと生まれ変わった⁽²⁶⁾。この新法では、穀物コミッショナー局(Board of Grain Commissioner)を設置し(第3条)、さらに穀物検査官局(Board of Examiners)(第40条)、穀物規格局(Board of Grains Standard)(第48条)、穀物調査局(Board of Grain Survey)(第52条)などを置くことで、公的機関が小麦を管理する体制を用意したのである。また、同法に基づいて、公営の穀物ターミナル・エレヴェーターが建設され、取引業者が不当な利益を上げられないように手が打たれた⁽²⁷⁾。『穀物生産者の手引き』は同年8月21日号から4週連続の特集記事を組み、「カナダ中の穀物を扱う農民は、カナダ穀物法のコピーを手に入れ、隅々まで目を通すべき」だと呼びかけた⁽²⁸⁾。この法によって、自分たちの穀物が業者に不正に扱われているという農民たちの不満をかなり解消することができた。

しかし現実には、コミッショナーたちが必ずしも農民の希望に沿う裁定を下すとは限らなかった⁽²⁹⁾。また、たとえ不正が無くなったとしてもなお、農民が不利な状況に置かれているのは確かであった。というのは、伊賀正亮が説明しているように、「…穀物買付け価格はウィニペグ(ウィニペグ)の商品取引所(Winnipeg Grain Exchange)に於ける現物価格(cash prices)又は定期価

格(futures prices)を基準に決定」されていたからである⁽³⁰⁾。小麦は先物商品であり、投機の対象となっていたことも、価格の不安定化と、ひいては農民の収入の不安定化の元凶であった⁽³¹⁾。

アーウィン(Robert Irwin)は、1907年の時点で、国家による小麦売買の一元管理というアイデアが浮上したと論じているが⁽³²⁾、遅くとも第一次世界大戦前から、小麦の流通と販売を一手に引き受けて価格の安定化に寄与する小麦局(The Canadian Wheat Board)の設立を求める声が、農民評議会などから上がっていた。

そのような要請がようやく政府に受け入れられたのは、数年の歳月を経て、第一次世界大戦になってからであった。戦争という非常事態は、国家統制を可能にした。1914年の戦時措置法(War Measures Act)第6条は、他の諸権限と併せて、物流や貿易に介入し管理する強力な権限を政府に与えたが⁽³³⁾、さらに1917年に連合国への小麦供給が不足して市場が混乱したのを受けて、連邦政府は、ウィニペグ穀物取引所の取引を停止して穀物管理者局(Board of Grain Supervisors)を置き、さらに戦後の1919年には第一次小麦局を設置して、その取引と価格に対する政府介入を行なったのである⁽³⁴⁾。

この第一次小麦局は、CAAの提案に基づき、オーストラリアでの事例に倣って設置されたが、その局長には、ウィニペグで輸出会社を経営していたステュワート(James Stewart)が就任し、SCECのリデル(Fred W. Riddell)が副局長となった他、アルバータのウッドやオンタリオのフレイザー(J.Z. Frazer)らが農民利権を代表して執行部に参加した⁽³⁵⁾。

この組織の第一義的な目的が、たとえ小麦の安定供給だったにせよ、政府一括管理に基づく小麦流通という制度は平原州の農民に恩恵を受けた。小麦局が、農民から作物を一手に集めて一元的に販売し、売り上げの平均金額を、年間を通じて農民に支払う「プール勘定(pooling account)」制度を導入したおかげで⁽³⁶⁾、農民は年間を通して安定した収入を得ることができた。また、それが利潤を求めない公的な機関であったがゆえに、1ブッシェルあたりの農民への支払い価格も平均を上回った。

しかし、第一次小麦局は、1919年産の小麦をわずかに1年間扱っただけで1920年に廃止になった。戦時から平時に戻り、ウィニペグ穀物取引所が再開して、小麦価格も再び国際市場経済に委ねられたのだ。

小麦局廃止と穀物取引所再開は、様々な立場から正当化された。たとえば、

「政治的に急進派であり、西部中で農民運動を支援し、国中で農民綱領について話している」ディーチマン (Robert John Deachman) は、「政治的に急進派であり、西部中で農民運動を支援し、国中で農民綱領について話している」人物であったが、彼は、「小麦局は政治的手段として思慮に欠けており、現実的な観点から実施不可能で、農民の経済的な救済手段としての価値を小麦局が持たない」との議論を展開した⁽³⁷⁾。そして、「西部カナダの農民運動の指導者や知的農民の多くが、小麦局の設立の動きを煽動してきた」と述べ、その取り組みの頂点にいたCCAとその会長ウッズの議論を批判の対象にした⁽³⁸⁾。すなわち、世界で小麦生産が集中する秋に出荷しているせいでは平原州小麦が競争力を失っているとするウッズの議論は誤りであるし、取引所を通しての投機が小麦価格の乱高下を引き起こすどころか価格の安定化にむしろ寄与しているし、戦時下では一定の成功を治めたとはいえ、小麦局を継続することが何ら将来の保証にはならないという見方であった⁽³⁹⁾。彼は、農民が自らの手で穀物を取り扱う手段を放棄して小麦局に任せて、自分たちの与り知らぬところで密室裡に行なわれる取引を信じるよりも、先物市場の経済原理に任せた方が農民に利すると主張したのである。

そもそも、小麦局については、平原州農民の中にも異論があったし、平原州農民を連邦政府で代表した進歩党議員がこぞって賛成したわけでも、他政党员がそれを揃って批判したわけでもなかった。たとえば、先にも紹介した進歩党のマハーグは、「(小麦局の設立は)この国の農民の強い反対を受けながら政府が導入した」のであり、「農民たちはそれを望んでいなかったし、求めもしなかった」と1920年の国会で述べた⁽⁴⁰⁾。

他方、このマハーグの小麦プールに否定的な発言や、同じ進歩党のグールド(Oliver Robert Gould)の同様の発言を取り上げてそれらを批判し、平原州農民が団結して小麦局再開に働きかけるべきだと主張したのは、連合党(後に保守党)議員のマイヤーズ(Edward Thomas Wordon Myers)であった⁽⁴¹⁾。3州とも熱烈支持とはいえないが、特にサスカチュワンが、小麦局のアイディアに消極的だとするマイヤーズに対して、マハーグは、小麦局が結果としてうまく機能していると評価した点を強調し、また、小麦局創設の2ヶ月後の年次大会で、SCECが全会一致で小麦局存続の支援を可決した旨を説明したが⁽⁴²⁾、実際は、特にサスカチュワンで、小麦局に関する意見が分裂していたのは明らかだった。

ウィニペグで穀物輸出業を営むリチャードソン(James A. Richardson)は、1922年4月に国会の農業・植民常任委員会に召還された際、他の商品では価格変動を輸出業者や取引所のせいにしていないのに、こと小麦に関してはすぐに穀物取引所や輸出業者が批判の対象になると不満を述べ、世界価格が変動する中、むしろ穀物取引所が西部農民を支えているとの認識を示した⁽⁴³⁾。これも、農民の運動に対峙していた人々の見方を代表する意見の1つであった。次節で述べるとおり、小麦プール設立の動きに対しても、同種の批判が噴出したのである。

他方、小麦局が残した実績は、多くの農民にとって非常に好印象に映った。穀物管理者局と小麦局は、第一次世界大戦中から直後にかけて、平原州の農民に、平均的な農家の受取価格を上回る額を支払い続けた⁽⁴⁴⁾。それは、小麦局が自分たちにとって有益だと、農民を納得させるに十分な成果であり⁽⁴⁵⁾、だからこそ、彼らは局の継続を願った。しかし、その願いは聞き入れられず、小麦局は廃止になり、1920年の夏からはウィニペグ穀物取引所が復活した。

必ずしも取引所のせいではないが、結果として、1920年秋以降の小麦農家は、収入減に悩まされた。戦後不況の影響が直撃して、1919年には農家受取価格の平均で1ブッシェル当たり2.37ドル(小麦局からは2.63ドル)得ていた支払額が、1920年には1.62ドルに、そして1921年以降は、0.81ドル、0.85ドル、0.67ドルへと年々減少したのである⁽⁴⁶⁾。そんな中、農民から小麦局復活の要請が出てくるのは当然だった。

1921年末には連邦政府で政権が交替し、キング自由党政権が誕生したが、ウッドらは、キングにも小麦局の再開を働きかけた⁽⁴⁷⁾。しかし、1922年3月15日にウッドと初めて面会した首相は、「(彼は)正直、愉快な人柄だったが、教条的であり、教育を受けていない人々のサークルで自信を生み出すような人物であった。西部農民が(ウッドら)理論家たちのなすがままになっているのは疑いの余地がなく、そのような危機から彼らを救うことが国家としての義務である」と日記に記したように、平原州の農民運動指導者に対するキングの見方はかなり否定的であった⁽⁴⁸⁾。そのような見方は、保守党と自由党とにある程度共通していた。農民の置かれた状況に一定の共感を持っていたとはいえ、彼らにとっては自由主義経済こそが合理的だったのである。

1922年4月の国会農業委員会では、クリーラー党首を含む29名の進歩党メンバーを中心に、小麦局の再開を求める意見が次々に提示された⁽⁴⁹⁾。対す

るマザーウェル農相は、強制的な局を作るよりも、前回選挙の際に保守党のミーエン(Arthur Meighen)が主張していた自発的なプールの形成が好ましいと反駁したが、彼の明確な反対にもかかわらず、委員会は局の再開に賛成の立場を示した⁽⁵⁰⁾。しかしそれでも、ミーエン保守党政権と同様にキング自由党も、小麦局再開に動き出す気配はなかった。結局、その再開は、世界大恐慌で農民たちが大きな打撃を受けた後の1935年まで待つことになるのだ。

3. 小麦プールの成立

1921年、小麦局の執行部にいたステュワートとリデルは、サスカチュワン州首相マーティン(William Melville Martin)の諮問に答えた報告書で、生産者の視点からすれば、小麦局による一括マーケティングほど農民の利益になる制度はないと強調したが⁽⁵¹⁾、既に述べたとおり、連邦政府はその再開に消極的であった。この時期、小麦局の再開に限らず、平原州農民たちは何らかの救済策を必要としていた。小麦価格が低下する中、連邦政府が鉄道運賃に関する規制を緩和させたことも、彼らに直接的な運動を促した⁽⁵²⁾。

小麦プールという発想は、第一次世界大戦末期にカナダでも一部の運動家の話題になり始めたが、それが具体的な計画として動き出すのは1920年以降であった⁽⁵³⁾。それは小麦局存続の要請運動と平行して進められた。CAAは小麦マーケット委員会(Wheat Markets Committee)を設置し、ウッド議長を中心に、プール設立に動いたが、小麦局と同様にこちらの計画も間もなく頓挫した⁽⁵⁴⁾。

しかし、小麦プールのアイデアは、平原州全体の統一的な行動案として再浮上した。そして1923年初頭には、小麦局の一時的な復活から小麦プール設立へと橋渡しをする計画が真剣に検討された。「純粹に協力的で非営利かつ非強制的な組織」を發展させるべく3州の州政府と農民組織が協力するなら、その第一ステップとして、小麦局を1年限定で再開させる法案を提出する用意があるとマニトバ州首相ブラッケン(John Bracken)が述べ、それに対してUFA執行部が、「小麦局の即時立ち上げに賛成しているし、同局ができるだけ速やか且つ安全に自発的なプールと合併することにも賛成している。そのために、執行部はできる限りのことをするつもりだし、それが組織全体の感情を表していると信じている」と返したのは1923年1月末だった⁽⁵⁵⁾。実際には、アルバータとサスカチュワンは、小麦局再開の要求を提出したが、ブ

ラッケンの熱意にもかかわらず、マニトバはその要求すら出せなかった⁽⁵⁶⁾。

州を超えた連携は決して簡単ではなく、小麦プール設立を求めた人々は産みの苦しみを味わった。そして結局、この計画も失敗すると、今度は UGG が、クリーラーの主張に基づいて、ウィニペグで 1920 年 6 月の初めに各州の農民組織や農民経営エレヴェーター会社の代表らを集めた会議を開き、そこで、州際プールを設立してはどうかと持ちかけた⁽⁵⁷⁾。小麦局を経ずに 3 州合同の巨大な小麦プールを設立しようとする動きである。しかし、SGGA や SCEC の反対で、そのような機構作りはここでも再び頓挫した⁽⁵⁸⁾。前節でも国会におけるマイヤーズの批判を取り上げたが、サスカチュワンは分裂し、結果として他州と異なる独自路線を貫こうとしたのだ。

小麦局再開が困難で、3 州合同のプール創設にも失敗した今、次は、州毎の小麦プールを作るのが最善策だと考えられた。1923 年の 7 月初めに UFA、UFM、SGGA が、それぞれ小麦プール設立に関する決議を通過させると、各々の代表者が同月 23 日と 24 日にリジャイナでの代表者会議に参加して、自発的な契約に基づく州別のプールと、3 団体合同の販売代理業者を置く方針で合意した⁽⁵⁹⁾。そしてアルバータでは 1923 年に、サスカチュワンとマニトバでも翌 1924 年に、それぞれ小麦プールが創設されたのである。この段階では、アメリカ合衆国カリフォルニアの法律家であり、農業協同組合のオーガナイザーでもあったサピロ(Aron Sapiro)の重要性が際立った⁽⁶⁰⁾。彼のアドバイスを受けて、各州の農民の 50%以上が小麦プールに参加する契約を行なった段階で活動を開始する方針が定められ、アルバータでは、ラン(Stephen Lunn)を議長とする小麦プール委員会が 7 月に立ち上がり、実際にプール設立に向けての準備が始められた。しかし、法律も未整備で、資金繰りも難しく、貯蔵施設などの確保も、マネージメントに関わる人材の確保も大変であった⁽⁶¹⁾。しかも、小麦プールがどの方向に進むか分からないうちから、州内の農民と契約を結んでいくためには、大規模な広報運動も必要になった。

そんな中、アルバータでは、UFA を州政府に就けた地方組織が、小麦プール設立の推進力となったし、州政府もこの動きに同調した。実際には 50% という目標の数字には届かない段階(46%)ではあったが、同州のプールは 1923 年の小麦の一部から自らの手で扱い始めることになった。アルバータ小麦プールの設立から 2 週間後、ウッドは UFA の会員に強い口調で協力を呼びかけた。エレヴェーター業者が敵対的な場所や好意的な業者の容量が乏しい場所

では、プールに登録した生産者が、自ら作物の積み込み策を考える必要があった。彼曰く、「プールの成功は、何よりも生産者の忠誠心と決意次第」だった⁽⁶²⁾。

サスカチュワンとマニトバも、アルバータの動きに追随した。5年契約のアルバータと契約終了年を合わせるために、2州では4年契約でのスタートとなった⁽⁶³⁾。小麦プールをめぐる意見が分裂していたサスカチュワンでは、SGGA 会長だったマハーグを外す画策が進められ、その後、組織は政治運動から後退して、その上で州政府との協力関係を軸にして、プールが設立された⁽⁶⁴⁾。

1923年7月に創設が決められていた3プール合同の販売代理業者(カナダ小麦生産者協同会社〔Canadian Co-operative Wheat Producers, Limited〕)は1924年に組織化され、同年8月20日に3つのプールと合意が結ばれた。そして各プール3名ずつの代表からなる執行部を中心に、運営がスタートした⁽⁶⁵⁾。さらに翌1925年までには、小麦プールは穀物エレヴェータービジネスにも介入するようになった。たとえば SCEC もプールが購入した⁽⁶⁶⁾。こうして、3州合同の大規模プールという当初の目標に近い体制が誕生して、彼らの運動は1つの決着を見たのである。

この一連の運動は、大きな摩擦と対立の中で進められた。農民からすれば、小麦局を認めなかった連邦政府への不信感をバネに進んだ小麦プールの運動であったが、こちらも国会の場でさまざまな批判に晒された。進歩党議員バード(Thomas William Bird)は、農民の当時の心情を1924年に次のように説明した。

農民団体の代表が小麦局(の再開)をこの場で求めた2期前の(1922年の)会期で、彼らは猛烈で執拗な反対を受けた。反対の声があまりにも強かったので、その法案は、実質的な意味を持たなくなる妥協をして骨抜きになるまで国会を通過しなかった。農民たちはそれを西部に持ち帰り、何とか有効に使おうとしたが、——必然的に失敗するより他になかったので——それに失敗すると、その関心は協同組合(小麦プール)に向かった。以来、その関心はずっとそこにある。小麦局法案がこの国会で審議されている時、それに反対した人々は、農民に対して、「もう少し自助努力によって耕作することを学べば、それが君たちの救済になるだろう。君たちは政府に依存

しすぎているのだ。地元に戻って自分たちでやってみたらどうだ」と言った。ところが、小麦局に反対して、そのような助言をした同じ人々が、今では農民たちの協同組合に向けての努力を邪魔しようとしているのに気づいた。議長、こういうことであろう。この国の——この問題についてはどの国でも——農民が自分たちの立場を向上させようとすればいつでも、彼らはすぐに既得権益者とぶつかってしまうのだ⁽⁶⁷⁾。

このような農民の不満は理解できようが、それに反対する人々は、単に農民の権利拡大を嫌ったわけではなかった。それは小麦局再開の問題と同様に、統制的な経済体制が優れているのかどうかという議論だったのである。そのため、連邦の二大政党である保守党と自由党——どちらも基本的に自由主義経済体制を支持していた——の双方からは、協力を得るのは初めから困難だった。たとえば、UFAのスピークマン(Alfred Speakman)と保守党のミーエンの1925年3月の国会での論戦にも、そのような対立が見られた。農民が直面している問題に個人ではなく集団で対応しようとするのはむしろ当然であるし、小麦プールがやろうとしていることは、プール会員の収入を増やしながら価格を安定させる点にあり、政府の独占とは全く状況が異なるのだと言うスピークマンに対して、ミーエンは、「西部の穀物をコントロールすることが、世界の小麦価格全般のレベルとカナダの小麦価格を引き上げる上でかなり重要な効果を発揮する」と小麦局のステュワートがかつて指摘した点を引き合いに出して、プールが独占企業化して消費価格にも悪影響を及ぼす可能性がある」と批判した⁽⁶⁸⁾。スピークマンはそのような危険はないと強調したが、平原州の農民が世界の小麦価格を決めるという誇張された議論は、農民以外の国民の不安を反映していた。

小麦プールに対する反対は国会に留まらず、多岐にわたった。その重要な拠点の1つだったウィニペグ穀物取引所は、プールに猛反対し、ユーコンやサスカチュワンに独自のラジオ放送局まで設置したほどであった⁽⁶⁹⁾。農民たちに批判された穀物取引所の側にも、言い分と強い不満があった。時代が下って1947年のラジオ放送で、彼らは次のようにリスナーに語りかけたが、自分たちがまるで邪悪な組織のように不当に槍玉にあげられていると認識したのだ。

穀物取引所は、それ自身が穀物を売買するわけでも統制したり、輸送、貯蔵、加工しているわけでもない。そこはただ単に穀物に関わる仕事をするあらゆる人々がお互いにビジネスをする場を提供しているにすぎない。取引所は取引を記録し、実際の販売時の価格を公に示せるようにするだけである。取引所は商業的な機能を果たさないし、配当も支払わない。あらゆる穀物利潤の中心的組織ではない⁽⁷⁰⁾。

彼らからすれば、自由で公平な取引を疎外して業者を締め出そうとする小麦プールの側にこそ非があった。

エレヴェーター業者や輸出業者なども、穀物取引所以上に熱心に反対運動を展開した。アメリカファームビューロー連合(American Farm Bureau Federation, AFBF)の元会長ハワード(J.R. Howard)がカナダ西部を訪れて、アメリカ小麦プールの失敗を語ったのも、そうした小麦プール運動反対派の牽制運動であった。農民側に立つ圧力団体元代表のそのようなプール批判は、重要な意味を持ったに違いない。

対するサスカチュワン小麦プールは、そのパンフレットで、アメリカ小麦生産者会社(American Wheat Growers, Inc.)のブラウン(W.J. Brown)会長の次の言葉を引用して反駁した。

アメリカ合衆国で失敗した唯一の小麦プール運動は、合衆国穀物生産者会社(The United States Grain Growers, Inc.)という名の、ハワード氏自らが始めたものであった。それはハワード氏が提唱した地域的なプール計画に基づいて形成され、完全な大失敗だと証明された⁽⁷¹⁾。

このように、農民組織と穀物取引所や関連業者は、アメリカの関係者と関係事例をも巻き込みながら、激しく対立し続けたのである。

穀物取引所や輸出業者を悪者に仕立て上げ、中間マージンをカットして、自分たちで生産から輸出までの全てを管理しようとする方法は、その分野で生計を立てる人々を敵に回したし、市場主義経済に対する挑戦もまた、多くの敵を生んだ。大恐慌を経てその影響力を減じた小麦プールを、戦間期の徒花と見ることも可能かもしれない。それにもかかわらず、プールは、第一次世界大戦前からの農民運動の集大成であった。多様な指導者が集結し、多く

の農民を巻き込んだ自立的な組織が、試行錯誤の末にそこで完成したのだ。

むすび

本稿は、カナダ平原州史を理解する上で極めて重要な、しかし、多様な組織が乱立して煩雑な農民運動の展開を体系的に理解し、その中で、小麦プールの位置づけを検証する点を主たる目的とした。

小麦プールの成功は、一時的なものにすぎなかったが、ウッドが高齢を理由にUFA会長から1931年に退いた後も、1937年までアルバータ小麦プールの会長で居続けたように、この時期の農民にとって、政治的な介入と同等に、もしくはそれ以上に、重要な意義を持つ機構であった。

小麦局と小麦プールのめぐる議論は、市場重視の自由主義経済か、それとも統制的な社会主義経済かの争いでもあった。その意味では、プールを、平原地域の農民が自立を目指した運動とだけ説明するのは単純化がすぎよう。アメリカ合衆国の農業経済学者ボイル(James E. Boyle)は、1930年の段階で「カナダの小麦プールを公平に偏りなく学ぶ者にとって、結論は1つしかない。すなわち、小麦プールはいまだに実験であり、成功を取っていない」と評した⁽⁷²⁾。しかもそれは成功の見込みが怪しい実験であったし、小麦プールによってカナダの財政構造が混乱を強いられているとボイルは主張した。小規模エレベーター会社が、商業ルートを通して自由市場で売買した方が自然だし、実際にそこで成功している農民も多いという議論である。その以前も以後も、彼は、カナダの小麦プールに対して辛辣な議論を繰り返した⁽⁷³⁾。

自由主義経済を信奉する人々が、小麦プールのような集産主義(Collectivism)的組織を嫌悪するのは、むしろ当然である。また、小麦プールが大恐慌を乗り越える力を持たなかったために、1930年以降は特に否定的な視線に晒された。実際、小麦プールが色々な問題を抱えていたのも事実であるし、プールに対する農民の意識も多様であったのは確かである。また、結局のところ世界大恐慌後に組織が形骸化し、小麦局の復活や農民救済諸法によって、農民は最終的に政府の支援を受けるようになったという否定的な説明も可能であろう。1927年にウッドは、「もしそれ(小麦プール)が間違っているなら、それは倒れるだろう。正しい事物のおかげでこの宇宙が動いているので、もしそれが間違っているなら、この宇宙を支配する偉大な力(The Great Ruling Power of this Universe)は、それを継続させないだろう。我々は自分たちの計画が正

しいものだ」と信じている」と述べたが⁽⁷⁴⁾、力を失った小麦プールの、神の摂理に見合わなかった失敗作と結論づけても良いのかもしれないし、あるいは逆に、形を変えながら生き残った組織ゆえに正しかったとみなすこともできよう。

いずれにせよ、小麦プールの農民の主体的な運動としてとらえた場合には、そこに別の重要性が見えてくる。そもそも、大恐慌を乗り越えられた自助組織などおそらくどこにも存在しないし、特に平原州が同時期に旱魃などの影響で不作に悩まされていた点を鑑みれば、1930年代以降の農民は、政府の救済を受けるより他、仕方がなかったのである。そして、そのような結果にかかわらず、小麦プールは、世紀転換期から第一次世界大戦を超えて円熟の時代に入った農民運動の自主的かつ積極的な努力の大きな果実であった。

小麦プールへと至る農民運動には、傑出した多くの指導者が関与した。彼らの思想的背景や、協調と対立の図式を正しく理解することが、複雑な平原地域農民運動をより包括的に捉えるために必要である。たとえばクリーラーとウッドの2人について、その考え方の相違や対立ばかりを強調して彼らの共通性を無視すれば、カナダの農民運動を大きな絵で描くことはできない。また、農民組織と穀物取引業者の激しい対立や、3州の農民や農民団体が置かれた状況の差異など、運動の背景について掘り下げるべき課題は多い。筆者にとって、このテーマの研究は、運動の展開とその特徴の骨格がようやく見えてきた段階にすぎない。今後、これらの課題に取り組むことが、戦間期カナダの政治経済状況を理解する際に重要な視点を提示してくれるはずである。

注

- (1) R. Douglas Francis and Chris Kitzan eds., *The Prairie West as Promised Land* (Calgary: University of Calgary Press, 2007), xiii.
- (2) 拙稿、「カナダ平原州の指導者 H・W・ウッドとアルバータ農民運動」『麗澤レビュー』第17巻、2011年、6頁。
- (3) Wilber W. Caldwell, *American Narcissism: The Myth of National Superiority* (New York: Algora Publishing, 2006), 98.
- (4) Bradford J. Rennie, "A Far Green Country Unto A Swift Sunrise: The

Utopianism of The Alberta Farm Movement, 1909-1923,” in Francis and Kitzan eds., *The Prairie West as Promised Land*, 243.

- (5) “L.I.D. Officers’ Duties (The address delivered by Bower on November 22, 1910),” *The Grain Growers’ Guide*, December 28, 1910, 24.
- (6) 西部カナダの農業史については、『プレイリー・フォーラム(Prairie Forum)』誌の掲載論文から分野別に優秀な研究を集めて再録した Gregory P. Marchildon, *Agricultural History: History of the Prairie West Series*, Vol. 3 (Regina: Canadian Plains Research Centre, 2011) などあるが、小麦プールに関する叙述は、一般的かつ限定的である。むしろ州別の研究や、特定組織の研究において、小麦プールについてもより詳細な叙述を見いだすことができる。

日本では、小麦プールについての言及は限定的だが、農業政策の観点から、いくつかの優れた先行研究を見いだすことができる。岩下龍一や小沢健二は、農政や農業経済全般に関する包括的な研究を行なった。岩下、『カナダの農業経済』(財)農林水産業生産性向上会議、1959年；小沢、『カナダの農業と農業政策：歴史と現状』輸入食料協議会、1999年。また、伊賀正亮の論考は、「研究ノート」とはいえ、農民側の運動を大局的・系統的に描き出しており、また、アルバータ小麦プールについても集中的に論じていて参考になる。伊賀、「西部カナダ農民の協同組織(Part I)~(Part V)」『四日市大学論集』第8巻第2号、1996年、第9巻第1号~第11巻第1号、1998年(特に Part III [第9巻第2号、1997年]、1-27頁、及び Part IV [第10巻2号、1998年]、17-55頁)。また、松原豊彦にも、以上の研究を踏まえた論考が多く見られる。そのうち、本稿ではとりわけ次を参照した。松原豊彦『カナダ農業とアグリビジネス』(法律文化社、1996年)、特に7章「穀物マーケティング・システムと小麦ボード」201-36頁。

- (7) United Farmers of Canada, Saskatchewan Section, "Do you know this?" (Saskatoon: United Farmers of Canada, Saskatchewan Section, 1926[?]), 3.
- (8) Ibid., 3-4.
- (9) “An Act respecting the grain trade in the Inspection District of Manitoba,” Assented to 7th July, 1900. 同法全条文はホームページで閲覧できる。<<http://www.grainscanada.gc.ca/cgc-ccg/history-histoire/timeline-historique/mg>

a-agm-1900-eng.pdf>(2012年3月14日閲覧)

- (10) Ibid. なお、平屋倉庫と穀物エレベーターは、共に穀物の集積と保管、そして配送を行なう基地である。小沢によれば、1890年段階では100棟以上の木造平屋倉庫が平原地域に建てられたが、鉄道会社が袋を用いない輸送を好んだために、徐々にそれに適した穀物エレベーターが主流になった。1900年までに450を超えるプライマリー・エレベーターが操業していた。小沢、『カナダの農業と農業政策』、66-67頁。プライマリー・エレベーター(マニトバ穀物法での表記はカントリー・エレベーター)は、鉄道網沿いに、当初は馬車で農場から届けられる範囲に網のごとく張り巡らされた穀物エレベーターであり、それらからの穀物を集荷するターミナル・エレベーターがオンタリオ州ポート・アーサー(Port Arthur)などに作られた。伊賀、「西部カナダ農民の協同組織(Part II)」16-17頁。
- (11) ホールによれば、当時の自由党連邦政府が、農民の権利を守った重要な法律だと喧伝し、1928年にパットン(H.S. Patton)がマグナ・カルタと評した同法は、当時の平原地域の農民から支持されていなかった。ホールは、1903年に同法が改正されて初めて——成果はいまだに不十分だったにせよ——、西部農民の諸権利が連邦政府によって認識されたのだと評している。D.J. Hall, "The Manitoba Grain Act: An 'Agrarian Magna Charta'?" in Marchildon, *Agricultural History*, 300-305(本論文は *Prairie Forum*, 4[1], 1979からの再録)。
- (12) Patricia Sherman, "Manitoba Grain Act,"
< <http://www.westmanitoba.com/things/grainact.htm> >(2012年3月16日閲覧)
- (13) Murray Knuttila and Bob Stirling eds., *The Prairie Agrarian Movement Revisited: Centenary Symposium on the Foundation of the Territorial Grain Growers Association* (Regina: Canadian Plains Research Center, 2008), 23.
- (14) Territorial Grain Growers' Association, "Report of the proceedings of the annual meeting of the Territorial Grain Growers' Association held at Indian Head, Assa., on Thursday and Friday, December 4th and 5th," (Regina: West Co., 1902[?]), 3.
- (15) Knuttila and Stirling eds., *The Prairie Agrarian Movement Revisited*, 1. そ

- の他、同連合の初期の歴史については、以下の冊子が参考になる。
Saskatchewan Grain Growers' Association, "A Quarter Century of Progress: A Partial Record of the Activities of the S.G.G.A. from 1901 to the Present Time" (Regina: Saskatchewan Grain Growers' Association, 1926), 47p.
- (16) Carol Jaques, *Unifarm: A Story of Conflict and Change* (Calgary: University of Calgary Press, 2001), xiv-xv; United Farmers of Canada, Saskatchewan Section, "Do you know this?" 3-4. この後の説明もこれらの文献に基づく。
- (17) Canadian Council of Agriculture, "The farmers' platform: A new national policy for Canada as adopted by the Canadian Council of Agriculture at Winnipeg, on November 29, 1918" (Winnipeg: Canadian Council of Agriculture, 1918), 3-5. 「ニュー・ナショナル・ポリシー」については、小沢、『カナダの農業と農業政策』69頁など参照。
- (18) Louis Aubrey Wood, *A History of Farmers' Movements in Canada: The Origins and Development of Agrarian Protest, 1872-1924* (Toronto: University of Toronto Press, 1975), 183.
- (19) Lisa Dale-Burnett, *Saskatchewan Agriculture: Lives Past and Present* (Regina: Canadian Plains Research Centre, 2008), 141-44.
- (20) United Grain Growers, "The Grain Growers record, 1906 to 1943: An abridged history of Grain Growers' Grain Company, 1906 to 1917, Alberta Farmers' Co-operative Elevator Company, 1913 to 1917, United Grain Growers Limited, 1917 to 1943" (Winnipeg: United Grain Growers, 1944), 4-7.
- (21) R.D. Colquette, *The First Fifty Years: A History of the United Grain Growers Limited* (Winnipeg: The Public Press Limited, 1957), 41-44.
- (22) 『穀物生産者の手引き』は、アルバータ大学ブルース・ピール特別図書館(Bruce Peel Special Library)のサイトで(1919年以前の号を部分的にはあるが)読むことができる。
<<http://peel.library.ualberta.ca/newspapers/GGG/>>(2012年3月17日閲覧)
- (23) Samuel W. Yates, "The Saskatchewan Wheat Pool: Its origin, organization and progress, 1924-1935: With some reference to the Alberta and Manitoba Pools, and to the Pools' central selling agency" (Saskatoon: the United Farmers of Canada, Saskatchewan Section, 1947), 16-17.

- (24) Dale-Burnett, *Saskatchewan Agriculture*, 109.
- (25) 拙稿、「カナダ平原州の指導者 H・W・ウッドとアルバータ農民運動」、13 頁。
- (26) 同法全文は以下で閲覧できる。
<<http://ia600406.us.archive.org/23/items/cu31924013913664/cu31924013913664.pdf>> (2012 年 3 月 18 日閲覧)
- (27) 伊賀、「西部カナダ農民の協同組織 (Part III)」、4 頁。
- (28) “Canada Grain Act,” *The Grain Growers Guide*, August 21, 1921.
- (29) Bradford James Rennie, *The Rise of Agrarian Democracy: The United Farmers and Farm Women of Alberta 1909-1921* (Toronto: University Toronto Press), 47.
- (30) 伊賀、「西部カナダ農民の協同組織(Part II)」、19 頁。
- (31) United Farmers of Canada, Saskatchewan Section, "Facts about 100% control" (Saskatoon: Publicity and Research Department, United Farmers of Canada, 1929[?]), 5-6.
- (32) Robert Irwin, "Farmers and 'Orderly Marketing': The Making of the Canadian Wheat Board," in Marchildon, *Agricultural History*, 241.
- (33) 同法の正式名称は、“An Act to confer certain powers upon the Governor in Council and to amend the Immigration Act, Assented to 22nd August, 1914.”
同法全文は以下で閲覧できる。
<http://www.canadiana.org/view/9_08039/0001> (2012 年 3 月 20 日閲覧)
- (34) 岩下、『カナダの農業経済』182-84 頁；松原、『カナダ農業とアグリビジネス』206-07 頁。1935 年に復活する小麦局に対して、1919 年に誕生した短命の小麦局は第一次小麦局と称される。
- (35) Colquette, *The First Fifty Years*, 146.
- (36) 伊賀、「西部カナダ農民の協同組織(Part III)」、14-15 頁；小沢、『カナダの農業と農業政策』、71 頁。
- (37) Robert John Deachman, "The Wheat Board Fallacy" (Calgary: Western Canada Publishing Co, 1919[?]), 4. ディーチャマンの紹介は同パンフレットの発行者の前文。
- (38) Ibid., 5.
- (39) Ibid. 特に 15, 22, 24, 26, 及び 30 頁参照。

- (40) House of Commons, *Debates*, May 21, 1920.
- (41) *Ibid.*, February 28, 1921. 彼は、サスカチュワン州キンダーズリー (Kindersley) 選出議員。
- (42) *Ibid.*
- (43) House of Commons, Select Standing Committee on Agriculture and Colonization, "The Wheat Board question: Minutes of evidence of Mr. James A. Richardson before the Select Standing Committee on Agriculture and Colonization at Ottawa," April 26, 1922, 6.
- (44) 岩下、『カナダの農業経済』282頁の付表32参照。同表によれば、穀物管理者局と小麦局は、平均よりも1ブッシェル当たり25セント以上高い額を支払っていた。
- (45) Colquette, *The First Fifty Years*, 46-47.
- (46) 岩下、『カナダの農業経済』282頁。
- (47) 1922年段階でのこのような働きかけにもかかわらず、ウッドの小麦局への支持は絶対的ではなかった。ロルフは、ウッドは小麦局をあくまでも一時的な解決策とみなしており、初めから小麦プールこそが重要だと信じていたと説明している。William Kirby Rolph, *Henry Wise Wood of Alberta* (Toronto: University of Toronto Press, 1950), 140. なお、1922年1月には、マニトバ農民連合もキング政権に小麦局再開を求めた。"Farmers Want Wheat Board Re-Established With More Power," *Ponoka Herald*, January 19, 1922.
- (48) Library and Archives of Canada, *Mackenzie King Diaries*, March 15, 1922.
- (49) "Western Members Voice Demand for the Wheat Board," *The U.F.A.*, April 6, 1922.
- (50) "Commons Committee on Agriculture Unanimously Recommends Wheat Board," *The U.F.A.*, June 1, 1922.
- (51) James Stewart and F. W. Riddell, *Report to the Government of Saskatchewan on Wheat Marketing* (Winnipeg King's Printer, 1921), 3; Irwin, "Farmers and 'Orderly Marketing'," 343-44.
- (52) Terry Pugh and Darrell McLaughlin, eds., *Our Board Our Business: Why Farmers Support the Canadian Wheat Board* (Winnipeg: Fernwood Publishing, 2007), 49.

- (53) Alberta Co-operative Wheat Producers, "Alberta Wheat Pool rally" (Calgary: Department of Education, Alberta Co-operative Wheat Producers, 1927), 8.
- (54) H.W. Wood, "Co-operative Wheat Marketing System Can and Will Be Established," *The U.F.A.*, July 3, 1923; Colquette, *The First Fifty Years*, 153.
- (55) "Would Merge Board Into Voluntary Pool," *The U.F.A.*, March 1, 1923.
- (56) Wood, "Co-operative Wheat Marketing System Can and Will Be Established," *The U.F.A.*, July 3, 1923.
- (57) William Kirby Rolph, *Henry Wise Wood of Alberta* (Toronto: University of Toronto Press, 1950), 139.
- (58) Ibid.
- (59) William Sanford Evans, "The Canadian Wheat Pool: An address before the Grain Dealers' National Association in convention at Buffalo, October 19th, 1926" (Winnipeg: Dawson Richardson Publications, 1926), 6-7.
- (60) William Archibald Mackintosh, *The Canadian Wheat Pools* (Kingston: Jackson Press, 1925), 3; Yates, "The Saskatchewan Wheat Pool," 14.
- (61) W.J. Jackman, "A Wheat Pool for Alberta," *The U.F.A.*, July 16, 1923.
- (62) H.W. Wood, "How to Defeat the Hostile Interests Opposing the Alberta Wheat Pool," *The U.F.A.*, November 15, 1923.
- (63) Ibid.
- (64) John Foster, *Developing the West* (Edmonton: University of Alberta Press, 1984), 254.
- (65) Evans, "The Canadian Wheat Pool," 8 ; 伊賀、「西部カナダ農民の協同組織 (Part II)」、14-15 頁。
- (66) Irwin, "Farmers and 'Orderly Marketing'," 344.
- (67) House of Commons, *Debates*, March 7, 1924.
- (68) Ibid., March 10, 1925.
- (69) Pugh and McLaughlin, *Our Board Our Business*, 10.
- (70) Winnipeg Grain Exchange, "Just a minute with the Winnipeg Grain Exchange: A series of radio broadcasts made by the Winnipeg Grain Exchange, January 2nd to April 30th, 1947" (Winnipeg: s.n, 1947), 4.
- (71) Saskatchewan Wheat Pool, "The Saskatchewan Wheat Pool: The proof of the pudding" (Regina: Saskatchewan Wheat Pool, 1923[?]), 8.

- (72) James E. Boyle, "Is Canada's Wheat Pool a Success?" *Barron's*, January 27, 1930.
- (73) Ibid. 他に Boyle, "Canada's Wheat Pool Fails: A Costly Experience, and Without Practical Value," *Barron's*, September 28, 1931 など。同紙は小麦プールに反対する姿勢を一貫して採り、例えば次のような記事も掲載している。Arthur P. Chew, "Agriculture's Proposed Plunge into Collectivism," *Barron's*, January 24, 1927.
- (74) Alberta Co-operative Wheat Producers, "Alberta Wheat Pool rally," 11.